

本院療養病棟の夜勤におけるストレス実態調査

本館 4 階病棟 田中洋子 田邊清美 船津真由美 中尾由里子 松崎美和子
加藤純子 松永桂子

はじめに

当院の療養病棟は平成 16 年 1 月に開設され看護師 1 名・看護補助者 1 名で 20~40 名の患者の日常生活援助などの看護を行なっている。

長期高齢化が進み当病棟でも、65 歳以上の患者が大半を占め、在院日数も長期化している。認知症・脳疾患患者・透析・ターミナル期の患者を夜勤は看護師 1 名と看護補助者 1 名で看護する事は、双方にかかる責任が重く心身両面での疲労も多大なるストレスとなっている。

そこで、今回当療養病棟に勤務する看護職のストレス実態調査を行いストレスの原因・検証を行うことで相互認識及び理解を深めストレスの低減に繋がる課題を明らかにしたいと考え、この研究に取り組んだ。

I 研究目的

療養病棟で夜勤を行う看護職のストレス実態調査を行い、ストレスの原因・検証を行う。また、看護職のストレス実態調査からストレスの低減につながる課題を明らかにする。

II 研究方法

- 1 期間 平成 21 年 10 月~平成 22 年 7 月
- 2 対象 療養病棟スタッフ
- 3 方法 療養病棟スタッフに対しストレス実態アンケートをおこない双方のストレス結果からストレスの高い項目に対して具体的な内容を記載してもらい内容を提示する。

倫理的配慮

ストレス実態調査に関する現状把握の為に、研究データ及び結果を使用するものとし文書で説明・同意を得る。

III 結果

看護師のアンケート調査より、ストレスの高かった順に①看護師の 1 人夜勤②ターミナル患者の対応処置③患者に何かあった時に全責任が懸るという重圧感という結果となった。ストレスと感じた場面・事例については、患者が急変した時に処置対応を 1 人で行わなければならない、他の患

者の対応が遅れてしまう。また、1 人で点滴管理・麻薬管理を行いながら、重症患者やターミナル期の患者、認知症・不穏の患者の対応などを行わなければならない。

看護補助者のアンケート調査の結果、ストレスの高かった順に①認知症・不穏患者への対応②1 人夜勤③家族への対応という結果となった。

看護師、看護補助者両者のアンケート結果、看護師は患者の死に対するストレスは 100%であったのに対し、看護補助者は、50%であった。ターミナルの患者の対応・処置に対するストレスは看護師、100%に対し、看護補助者 67%であった。職場の人間関係に対するストレスは看護師は、67%に対して、看護補助者は 75%であった。

IV 考察

医療技術が目覚ましく進歩するなかで、看護職は患者の療養上の世話、処置、患者及び家族への対応に追われ心身両面でのストレスにさらされている。当病棟では、看護師、看護補助者の 2 名夜勤体制である為、患者に何かあった時に全責任が懸るという重圧感や、患者の安全面への配慮を考えた場合少ない人員で管理しなければならないという事が、ストレスの要因となっている。

田中らも¹⁾「看護職のストレスは、個々の看護職の健康保持を害する。患者へ提供されるケアの質やそれを受ける、患者さんへ、直接・間接に影響する。したがって、看護職のストレスマネジメントを行うことは、看護職、患者双方にとって同時に意義のあることである。」と述べていることより、私たち看護職がよりよい看護を提供する為には、ストレスに対する理解を深め、どのように緩和するかは、看護者の任務として重要である。
結論

- ・療養病棟に勤務する看護職のストレスの内容は患者の生死に関わる事を少ない人員で行う為、全責任が懸るという重圧感によるものであった。
- ・ストレスの低減を図る為には、ストレスに対する看護師・看護補助者、相互の理解を深める事が重要な課題である。

